

## 真冬の朝日を浴びながら

まだ静かな道歩く  
足音だけ聞こえてくる  
真冬の朝日を浴びながらゆく

そっと吐き出す白い息が  
光にほどかれ空へと溶けゆく  
眠りの名残り 抱えて  
影を連れて歩く

陽の光  
冷たさの奥にある  
かすかな温もりをこの  
手のひらで確かめ  
今日という日が  
静かに始まる

駅へ向かうまばらな影  
長く伸びては揺れている  
真冬の朝日を浴びながらゆく

駅のたびに停まる電車  
扉が開くとき冷たい風が  
コートの襟 僅かに揺らし  
小さく震えてしまう

車窓（マド）の外  
冷たい風の中  
淡い光 ビルのフチを染め  
手すりを握りしめ  
今日という日が  
動き出してく

## AI が答えてくれる

切なさはまだ痛だけの感情でない  
まだ言葉にならないものが潜んでいる

さわれば崩れてしまいそうな  
薄いガラスのようできて  
その奥には深掘りするたび  
震える

AI は魔法でないけれども  
少し前に 進む光が僅かにある

言葉を探し続けて夜が更ける  
それは  
まだ終わってはいない想いの証

忘れたくない感触と  
忘れたい記憶  
よりによって  
この体の同じところに  
眠っているから

AI が答えてくれる胸の奥で  
灯りが  
小さく揺れる

## 今でも君は

時が流れて 景色も変わり  
歩く道は 別々のままに  
ふれられない距離になっても  
言葉を交わせなくても

心の奥 心のどこかで君は  
確かに息づいている  
時折思い出すこともあって  
忘れられないものがある

まるで静かな 風のように  
思い出にふれている時  
胸の奥にそっと吹き抜けて  
揺らぎを残していく

それはきっと気持ちの中で  
大切にしていた証  
今でも君は僕の片隅で  
静かに、やわらかく、光っている

心の奥 心のどこかで君は  
確かに息づいている  
時折思い出すこともあって  
忘れられないものがある

## つかの間の陽の光

少し寒くなった午後の  
陽の光を浴びながら  
西へ向かう鳥たちにも  
うつろな鳴き声が聞こえてくる

我が子のこともわからぬほどに  
年老いてしまっても  
今よみがえる子供の頃に  
遠くを見つめながら

杖をついて歩く姿に  
涙も枯れてしまう

ずいぶん昔の出来事を  
まるで昨日のことのよう  
幼い頃の我が子のことを  
妄想に浮かべながら

笑いながら走った日よ  
あの頃は帰らない  
今よみがえる若い頃を  
打ち砕く残酷さ

年をとってどうなるか  
誰にもわかるはずない

## 冬の九十九里

砂浜に影が伸びて  
寄せては返す激しい波が  
静けさの中胸に響く  
確かな命感じるひととき

両手広げて薄紅浴びて  
自分の長い影を作る  
その後ろに遠くの雲  
ゆっくりと朱色に染まる

冬の夕日海の中に  
そっと触れる九十九里の  
浜に静かな金色の風  
その風だけはどこかあたたかく感じる

波は薄紅をまとして  
寄せては返すとまることなく  
静けさの中胸に響く  
永遠の音感じるひととき

今日の夜はいつもと違う  
綺麗な星空の下  
胸の奥の凍ったもの  
ゆっくり溶かしていく

人もまばらな海岸線を  
そっと優しく九十九里の  
浜に足跡つけるたびに  
心の奥のざわめきをさらってゆく

冬の夕日海の中に  
そっと触れる九十九里の  
浜に静かな金色の風  
その風だけはどこかあたたかく感じる

## 春を待ちわびて

ビルの谷間抜ける風が突き刺さる  
空はどこまでも薄い色で

雪さえもない冷たさだけが  
じんわりと体温奪ってゆく

凍りつく朝の光の底から  
ひとひらの温もりそっと探す

乾いたアスファルト  
街路樹の影を  
細く長く描く黒い色で

人の流れに紛れてみても  
誰の温もりも届かない

信号の光が無機質に輝く  
都会の冬の中  
目立つ色で

凍りつく朝の光の底から  
ひとひらの温もりそっと探す

ビルの谷間抜ける風が突き刺さる  
空はどこまでも薄い色で

## ジグソーパズル

私には決められた  
居場所がある  
ぴたりと収まる場所  
どこかにある

合わない景色をこわし  
無理に押し込まないで  
静かに落ち着いて  
輪郭を探して

誰かが決めた枠でなく  
私というピース  
自分の形を探し  
自然に息をする場所

どこか不器用で  
いびつな私  
それでも収まる場所  
どこかにある

たった一つの間隙をさがし  
そこに収まった時  
世界の絵は少しだけ  
完成に近づく

誰かが決めた枠でなく  
私というピース  
自分の形を探し  
自然に息をする場所

## 寒さと共に「グッドバイ」

言葉にならない想いを抱えたまま  
すれ違ってゆく影が消えてゆく

「またね」と一言  
言えなかった  
白い息に紛れて  
遠くに消えてく

冬の終わりは  
どうしてこんなにも  
永遠の別れを  
連れてくるのだろう

寒さにさよなら  
それと共に感じる  
あなたが連れてきた別れの痛みも

胸の奥にしまって  
歩き出す  
まだ見ぬ季節に  
足を踏み出す

冷たい風の中で  
春に向かおうとして  
取り残された心  
置き去りにしたまま

冬の終わりは  
どうしてこんなにも  
永遠の別れを  
連れてくるのだろう